

授業の目標を児童の姿で捉える授業設計について

高度学校教育実践専攻教職実践高度化系

教員養成特別コース

氏名 出尾 森梧

キーワード：目標の精緻化，授業構成図

実習責任教員 江川 克弘

実習指導教員 木下 光二

1. 課題設定の理由・目的

筆者は基礎インターンシップにおいて、小学校第3学年道徳の内容項目「伝統と文化の尊重、国や郷土を愛する態度」にあたる授業実践を行った。本授業で筆者は、捉えていた授業目標が曖昧であったため、焦点化された学習活動を行わせることができず、授業目標を児童が達成できたかどうかの判断も曖昧になってしまった。そこで、授業の目標を児童の姿で捉えることと、その授業目標を達成するための学習活動を考えることに主眼を置いた授業設計ができるようになりたいと考え、本研究課題を設定した。そのため、授業設計の手立てとして「児童に気付いて欲しいこと・理解してほしいこと」とそれらを「どこから導き出せるか」を記した授業構成図を作成し、授業実践を行うこととした。

2. 総合インターンシップ I における実践

小学校第6学年で行った国語科「時計の時間と心の時間」(全5時間)の単元における、2時間目の授業実践について述べる。筆者は本授業における授業後の児童の姿(=授業目標)を「自分の考えを主張するときは、主張に必要な相手に分かりやすい事例を挙げて主張しようと思えるようにする」と設定した。そして、授業目標を達成するために、「時計の時間と心の時間」を読み、主張に説得力を持たせる書き手の

工夫(多くの人共感できる事例を挙げたり、実験を示して誰もが納得できる事例を挙げたりすることなど)を探す活動を設定し、それらの児童に気付いて欲しいことを、どこから導き出すことができるのか、授業構成図に整理し、授業を行った。

本授業実践の成果は、前時の授業目標も児童の姿で捉えていたため、本時の授業を始める際の児童の姿を明確に把握することができており、導入から本時の主たる活動まで約2分とスムーズに行うことができたことである。筆者は前時の授業の目標(=授業後の児童の姿)を、本文を読み「本文の筆者の主張は納得できると思えるようにする」とし授業を行った。そのため、前時の授業の終わりに、本文の筆者の主張に納得できるかというアンケートを行ったところ、全員が納得できると答えた。本時の導入は、このアンケート結果を示し、筆者の主張は誰もが納得できる内容であるとして押さえることができた。このことによってその後、筆者が書いた文章のどこに説得力を持たせる工夫があるのかを探す活動に繋げることができた。全ての授業の目標を児童の姿で捉えることで、より児童の考えに沿った導入を行うことができると考えた。

本授業実践における課題は3つある。1つ目の課題は、本時の授業の振り返りを見ると、本

授業で達成すべき児童の姿になっていない児童が21人中11人もいることである。その原因は、本時の学習活動と、授業目標として設定した授業後の児童の姿を達成できたかどうかを判断するために行った振り返りにズレが生じていたからである。ズレが生じた原因は、児童が説明文の筆者の工夫を捉えることができれば、児童は自然にそれを使って自分の主張をするだろうと筆者が考えたことにある。そのため今後、授業後の児童の姿を実現できるように、児童に必要な考える時間を学習活動内で十分に設けることとする。

2つ目の課題は、児童がこれまでに気付いていることを本時に生かすことができなかつたことである。筆者は、本授業において気付かせたいことを、本時の学習内容のどこから導き出すことができるか、ひとつひとつ整理して授業を行った。しかし、全てのことを本時で1から取り扱ったため、授業の内容が過密になってしまい、授業の後半につれて急ぎ足で説明してしまつた。このことを改善するためには、授業構成図において気付いてもらいたいことを、本時の学習だけではなく前時の学習と繋げる必要がある。そのため、前時までに気付いていることを整理し活かすことで、児童の考える時間を短縮し、他の気付かせたいことについて、余裕を持って考える時間を設けることとする。

3つ目の課題は、授業目標と単元目標を混同してしまつていることである。本単元の目標は、主張と事例の関係を捉える力を定着させることである。そのため筆者は、授業後の児童の姿(=授業目標)を「自分の考えを主張するときは、主張に必要な相手に分かりやすい事例を挙げて主張しようと思えるようにする」と設定した。しかしこの児童の姿は、授業後の児童の

姿というより、単元後の児童の姿である。授業後の児童の姿は、単元後の児童の姿を達成するための過程である。そこで筆者は、授業目標と単元目標が混同しないようにするために、授業構成図に、単元後の児童の姿(=単元目標)も記入する必要があると考えた。

これらのことから、総合インターンシップⅡでは、授業の目標を児童の姿で捉え授業設計を行う上で、児童の考える時間を十分に取ったり、既習事項から本時の気付いて欲しいことに繋げたりし、授業の構成にズレがないように設計したいと考えた。また、授業構成図に関して、授業後の児童の姿だけではなく、単元後の児童の姿も記入し、単元の見通しを持った計画を立てることができるようにした。

3. 総合インターンシップⅡにおける実践

小学校第6学年で行つた算数科「比例と反比例」(全17時間)の単元における、10時間目の授業実践について述べる。本単元は、伴つて変わる2つの数量の関係に着目し、目的に応じて表や式、グラフを用いて表現したり、活用したりする単元である。そのため、2つの数量の依存関係を捉え、変化(表を横に見る)と対応(表を縦に見る)の規則性に着目し、規則性を問題解決に活用するという一連の活動を行うことで、関数についての考察の仕方を身に付けることができる。これらのことを踏まえて筆者は、児童が比例と反比例に関する知識・技能を身に付け、「比例って便利!」と感じることを本単元後の児童の姿とした。さらに、単元後の児童の姿を、比例が便利と考えることができるように、本時の授業後の児童の姿を、本授業で取り扱う問題(図1)を解き、「比例を使うと、全体のおよその数を求めることができるということを理解する」とした。

問 1 1枚の厚さが4 mmの板を全部積み重ねて厚さをはかると、約60 cm ありました。板はおよそ何枚あるでしょうか。

図 1. 本時に取り扱った問題

本時までの学習の中で児童は、比例の関係の表を縦に見たり横に見たり、式やグラフにしたりすることで関数的な見方・考え方を深めてきた。そのため、本時の活動の中で使うことのできる既習事項は「比例とは x の値が2倍、3倍…になると、 y の値も2倍、3倍…になること（表を横にみること）」「 y の値 $\div x$ の値=決まった数になること（表を縦に見る）」といった比例の性質である。これらのことを本時の学習で活かすために、筆者は導入時に既習事項の確認をし、授業を行った。また、児童が本時で取り扱う問題は、比例関係を使って解くことができるということに気付けるように、筆者は問題文から図2のような図を描かせ、伴って変わる2つの量に注目することができるようにした。そして、そこから本時の授業後の児童の姿(=授業目標)である「比例を使うと、全体のおよその数を求めることができるということを理解する」という姿を実現できるように、授業構成図を作成し、授業を行った。

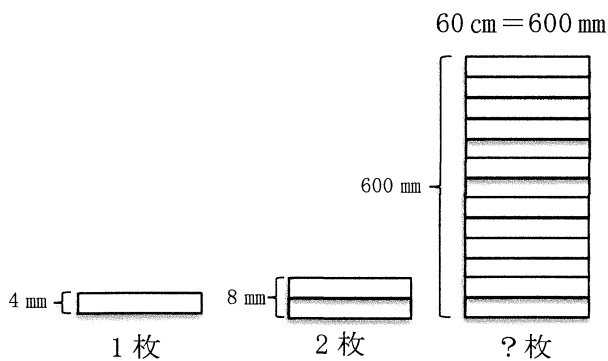


図 2. 筆者が問題文からイメージした図

本授業実践における課題は、児童に気付いてもらいたいことを率直に提示し過ぎたことにより、児童が教師の意図を察してしまい、教師が先導するような授業になってしまったことである。前述したように、筆者は児童に本時で取り扱う問題が比例関係を使って解くことができることに気付いてもらうために、問題文の図を描かせ、2つの伴って変わる量に注目させた。そのため、図を描かせた後、児童に「どのような考え方が使えそうか」と問うと、児童は「比例の関係が使えそう」と答えることができていた。しかし、筆者は意図的に、この問題が比例の関係を使って解くことができることに気付いてもらうために、問題文にはない板が2枚の時の図を描かせたり、板が1枚の時の厚さと沢山ある時の厚さをあえて並べて描かせることで比べたりできるようにしていた。また、配布したワークシートにも、これまでの学習で比例の関係をまとめてきた表が描かれていたり、授業の始めに比例の関係について復習したりすることによって、本時に比例を使うことが明白になってしまった。このことから筆者は、今までどのように児童に気付かせるのかという視点で授業を構成していたが、児童がどう気付くのかという視点で授業を構成するべきであったと考えた。

本授業実践の成果は、単元の振り返りで「比例の関係は便利」という意見や「比例の関係をを使うと分かりやすい」という意見を多く引き出すことができたことである。これは、筆者が想定していた単元後の児童の姿に近い姿である。しかし、この成果からも前述のような課題が見て取れる。筆者は、単元の振り返りを行う前に、身近に比例を使って考えることのできる場面があることを想起させるため「例えば、先生の歩幅が1 mで、黒板の端から端までが、1歩、2歩、

3歩, 4歩(実際に歩いて数えながら)だとすると, 黒板の幅は何mくらいであると考えられますか?」と質問した。すると児童は直ぐに「4m」と答えることができた。そのため筆者は, 本時のまとめと関連付けながら「そうですね。歩数のように, 同じものが沢山ある時, 比例の関係を使って, およその数を求めることができますね」と返答した。このように筆者は, 児童に比例の有用性を感じさせるための例を挙げた。しかし実際に, 児童自身が比例の有用性を感じたかは定かではない。そのため, 児童自身が有用性を感じることでできる場面をつくる必要があった。本時の授業内容は, それに適した教材であり, 児童自身が比例の有用性を感じるように構成するべきであった。

4. 今後の展望

まず, 授業の目標を児童の姿で捉えることについて述べる。実践後, 筆者は研究を構想する段階で, 授業の目標をどのようにして児童の姿で捉えるかということが不明確であったと感じた。しかし, 実践を通して考える中で, 単元の終わりにその単元内容を「便利」「意味がある」と, 児童が思えるようになることこそが理想の児童の姿であると考えようになった。その姿は, 自身の学習を振り返り, この学習が今後の生活で役に立ちそうであると考えたり, この単元を学習して意味があったと考えたりといった, メタ認知を働かせている姿である。単元の終わりに児童がその単元で扱う学習内容を「便利」や「意味がある」と思えるようにするために, 授業目標は, 学習内容を「便利」と感じたり, 「意味がある」と感じたりできる要素にならなければならない。ひとつひとつの授業の学習内容が児童にとって「便利」「意味がある」と実感できるものであれば, 学習内容を振

り返った際に, 自身に必要な知識であったと捉えることができるであろう。

次に, 授業構成について述べる。前述したように, 筆者の課題は, あたかも児童が主体であるかのように装った授業構成にある。筆者は, 授業の目標を達成するためには, どのようなことに児童が気付かなければならないかという観点で授業を構成していた。しかし, この構成によって, 本当に当該のことを児童自身が気付くことができるかという観点が抜けており, どうしても児童が気付くことができない場合は教師が教えてしまうしかない, 端から高を括っていた。この怠惰により, 教師が授業の主体を児童から奪ってしまっていた。児童が, その教材からどのようなことに気付くことができるかを見抜くためには, 教師が教えるという立場とは別に, ひとりの人間として, 児童と同じ目線で教材と向き合う必要がある。野口(2011)は, それを素材研究と呼んでおり, 素材研究を行うことにより, 子どもにとっての「不備」「不足」「不十分」そして, 「躓き」を予測できるようになると述べている。筆者はこれから授業を構成してく上で, 素材研究は最も必要な作業の一つであると考え。そのため今後筆者は, 授業を構成する最初の作業として, まずは教師ではなくひとりの人間として教材と向き合い, その教材そのものからどのようなことに気付くことができるかについて考える。そして, 学習指導要領や指導書と照らし合わせ, その単元でどのようなことを教師として学ばせなければならないかということを確認した後に, 児童が教材そのものから気付くことのできることを軸に, 児童が築く授業を構成していく。

【参考文献】

野口芳宏(2011)「野口流 教師のための発問の作法」学陽書房